

カシュカイ語の統語法と語彙に関する現地調査

栗林 裕

(岡山大学)

対象言語	カシュカイ語
調査地	イラン・イスラム共和国シーラーズ市
調査日程	2002年8月11日～2002年8月19日 2003年8月12日～2003年8月15日 2004年8月4日～2004年8月9日

1. はじめに

本稿では主に調査の背景について報告することにし、言語データの詳細な提示や分析は機会を改めて行う(cf. Kuribayashi 2004)。

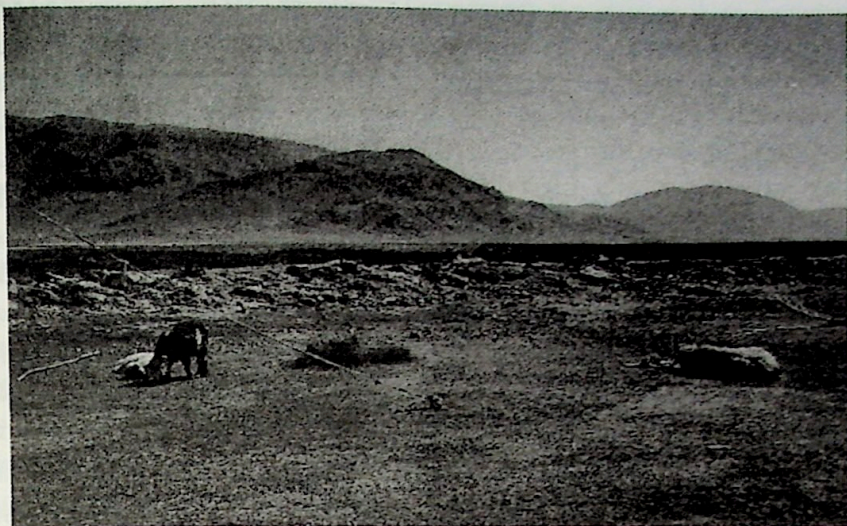
カシュカイ語はチュルク語南西グループに属し、イラン南部Fars州を中心に分布する言語である。話者数は正確な統計がないため参考の数値であるか141,000～510,000 (Soper 1987)という報告がある。カシュカイ語の話者は部族社会を形成しており、歴史的には周辺のペルシア系遊牧民族などさまざまな要素から成り立っているといわれている。母語はカシュカイ語で、就学年齢に達するとペルシア語を学ぶため、若年層から高年層までペルシア語との二言語併用であるといえる。

カシュカイ語に関連する先行研究はSir Aurel Steinのノートを記述したKowalski(1937)に始まるようである(報告者未見)。しかし正確にはカシュカイ語ではなく、Äynalluという別の遊牧民の方言であるようだ(Csató 2001:108)。その後、1970年代初頭のゲッチンゲン大学のエクスペディションをまとめたDoefler&Hesche&Ravanyar (1990)が出版されるが、語彙集が主体で、談話はわずかに収録されているのみで統語法についての詳しい記述はない。その後、カシュカイ語の統語法を扱った文献はSoper (1987)で、これは博士論文を纏めたものである。最近ではCsató (2001), (2004)によるカシュカイ語の時制等のコピーについての論考が公刊された。チュルク語のなかでは、まだ関心も薄く、不明な点も多い言語であるといえる。

2. シーラーズへ

今回の調査にあたっては、事前に現地のカシュカイ語話者とのアクセスするための時間的余裕がない状態で出国した。調査はイラン南部の中心都市であるシーラーズを拠点にするのが無難であろうと当たりをつけ、とりあえずテヘラン経由でシーラーズに入った。イランの国内線は予想以上に時間に正確に運行されており、また機体自体も新しいものを使っており安全面で不安を抱かせるものではなかった。しかし日本からの予約はなかなか思うようにいかなく、事前に理由なく予約変更ができなくなる等のトラブルもあった。また現地でフライトの変更を試みたが、予約回線が頻繁にダウンしたりするためなかなか難しい。一日目にホテルにチェックインした後、カシュカイ族についてホテルの従業員に尋ねるが、夏は露営地に移動しておりシーラーズ近辺にはいないという。またカシュカイ族の知り合いもいないということを知り、覚悟はしていたがカシュカイ族の調査は簡単にいきそうにないと感じた。しかし到着二日目に意外な形での展開があった。たまたま立ち寄った旅行代理店でカシュカイ族のことを聞いてみると、シーラーズ市内に住む知り合いがいるという。また、以前にカシュカイ族の露営地を訪問するツアーをしたことがあるとのことである。もちろん定期的なツアーではなく、すべてオーダーメイドの少人数によるツアーのようだ。旅行代理店はツアーが目的で立ち寄ったのではなく、ネットカフェを併設していたので、当初はメールを確認するのが目的であった。イランの地方都市ではネットカフェの数も少ない。また、旅行代理店もそれを見込んで商売をしている。ネットカフェで外国人を呼び込み、その後、観光ツアーに話を持っていくというのはよく見られる商売の仕方である。

そこで、この旅行代理店でカシュカイ族の露営地を訪問するツアーをアレンジしてもらうことにした。翌朝の5時にシーラーズを出発し、郊外の露営地を目指した。ツアーには説明してくれた旅行会社の経営者自身と案内役のシーラーズ在住のカシュカイ族の親子二人が同行した。シーラーズには定住のカシュカイ族の人々も多く住んでいる。そのとき初めてカシュカイ語の話者と会話をを行ったが、トルコ語はあまり通じない。第一印象としては、かなりペルシア語の語彙がはいっているし、統語法もかなりちがう感じである。トルコ共和国のトルコ語との接触もほとんどないようである。この点はイランのアゼルバイジャン語話者とは状況が違うようだ。トルコとの国境に近いタブリーズではトルコからのTV放送が衛星アンテナを通して入ってくるし、TVなどのメディアを通してトルコ語の言い回しも若い世代では知っている。今回のツアーでは二つのカシュカイ族の露営地を訪問した。



訪問したカシュカイ族の露营地

3. 語彙の調査

はじめに訪問した露营地ではちょうどイラクにあるシーア派の聖地から帰還した部族のリーダーを出迎えるお祝いをしているところで、部族の親戚一同が集まっていた。そこで今回のインフォーマントであるAさんと出会った。Aさんは21歳のテヘラン大学の女子大学生で、夏休みで故郷のシーラーズに帰省しているところであった。シーラーズ市内に住む定住のカシュカイ族である。高校卒業後は大学に進学したためテヘランに住んでいるとのことである。下例はAさんから語彙調査を行った資料の一部である。ペルシア語の語彙も部分的に基礎語彙の中に見られる。

	カシュカイ語	ペルシア語	トルコ語
頭	boš	sar	(baş)
薬	daruman	dārū	(ilaç)
家	ev	khāne	(ev)
金	talo	talā	(altın)

カシュカイ族の中年以上の女性は黒いベールではなく常に民族衣装を着て生活している。また一応男女の食事とか談笑する場所は区別されているが、必要

があれば異性とも比較的自由に接するようである。また、カシュカイ族は絨毯織物の生産でも有名であるが、生産物を消費者に供給する流通システムは体系化されていないようである。また外国人を迎えることで報酬を得るようなシステムも確立しておらず、専ら彼らの善意により訪問は受け入れられている。したがって今回の案内人である旅行会社の経営者（ペルシア人）はカシュカイ族の人を同行する必要があるのだ。ちなみにその経営者は今回初めて露营地に来て、カシュカイ族の生活を間近に見たそうである。ペルシア人とカシュカイ族はシーラーズにおいては共生しているが、両者の間には微妙な壁があるようだ。たとえばシーラーズにはカシュカイ族が集まって住む地区がある。その地区は主に中低額所得者層地区にある。翌日には、旅行会社のオフィスで同行してもらったカシュカイ族の男性(54歳)Bさんに対して語彙調査を行った。この男性は義務教育終了後(12歳?)まで遊牧生活をしており、その後シーラーズに定住し配管工として仕事を始め、現在に至るそうである。

以上のような経緯で私はシーラーズ定住のカシュカイ族男性であるBさんの家族と交流することになった。その翌日以降、毎晩自宅に招いてもらい晩御飯をご馳走になる。自宅は中庭つきの家で夕食はいつも絨毯を敷いて夜空の下で夜遅くまでおしゃべりが続く。近所にはペルシア人の家族も住んでおり、一緒に食事をしたり、女性は水タバコを吸って談笑する。



水タバコを楽しむカシュカイ族の女性と近所のペルシア人女性

Bさんには奥さんと三人の息子と二人の娘がある。真ん中の息子はイギリスで、働きながら勉強しているそうである。もう5年も息子と会っていないそうだ。下の息子は当時高校生で、上の息子は配管工をしつつ、オーストラリアに研修生として行く準備をしているところであった（結果的に査証はおりなかった）。上の娘はペルシア系のロリ族男性と結婚している。下の娘は独身で、義務教育後、家事手伝いをしている。

4. 統語法の調査

またシーラーズの滞在が続くにつれ、滞在していたホテルの近所の本屋の従業員がカシュカイ族であることがわかったり、ホテルの向かいにある銀行の両替コーナーの行員がカシュカイ族であることが判明した。その銀行員であるCさんは21歳のシーラーズ大学の学生で実習生として銀行で働いていた。大学では英語教育を専攻し英語の運用能力もあり、また母語であるカシュカイ語の文法についての基本的な知識もある。媒介言語の困難さがない点や英語と比較しながら統語法についても内省ができる点で得難いインフォーマントとなった。時間的な制約があり、十分に調査ができたとはいえないが、彼女の協力により統語法についての例文調査を2002年度、2003年度および2004年度に実施することができた。

まず統語法のパターンには部分的にペルシア語の統語法からの明確な借用がみられる。

Bir kitab-I ke bazar-da al-dī-m.
one book-DEF that market-LOC take-PST-1.SG
'The book which I bought at the market.'

上例は関係詞の制限的用法であるが、ペルシア語との語順が同じなのはいうまでもないが、ペルシア語同様に関係節により限定された主要部名詞には-Iが用いられ、必須要素になる。主要部名詞に-Iが表示されない関係節は非文法的である。

* Bir kitab ke bazar-da al-dī-m.
one book that market-LOC take-PST-1.SG
'The book which I bought at the market.'

次例はモダリティ表現である。(b)はペルシア語で(a)はカシュカイ語であるが主動詞が希求形をとり、副詞的要素でモーダルな側面をあらわす。副詞的要素はペルシア語の**bāyad**のコピーである。

a. Mān gereg ged-ä-m ev-e.
 I should go-OPT-1. SG home-DAT
 'I should go home.'

b. Mān bāyad be khāne be-rav-am.
 I should to home IMP-go-1. SG
 'I should go home.'

以上のように、語彙はチュルク系だが、統語法がペルシア語からの借用であるような例が統語法全体の中で部分的に見られる。また語順に関しても、焦点表示の観点からみて、チュルク系諸言語からの逸脱が見られる。

a. Sen git-ti-ŋ hara-ya?
 you go-PST-2. SG where-DAT
 'Where did you go?'

b. Sen nemenä al-dī-ŋ?
 you what-ACC take-PST-2. SG
 'What did you buy?'

(a)は場所を聞く場合の疑問詞の定位置が述語末であることを示す。述語の直前でも非文法的ではないが、述語末のほうがより自然であるようだ。しかし目的語が疑問の焦点になる場合は(b)のように述語の直前でなくてはいけない。



カシュカイ族の夫婦

5. シーラーズの定住カシュカイ族

シーラーズ滞在の最終日にはDさんをBさんより紹介してもらおう。Dさんはシーラーズ市内の観光地で喫茶店を営む実業家である。定住カシュカイ族であるが、かなりの資産家だ。Dさん自身に調査を行うことはなかったが、いろいろなことについて教えてもらった。銀行員のCさんの話をすると、DさんとCさんは同じ部族であることが判明した。またBさんとCさんは部族は違うが、名前を聞いたことがあるという。つまりカシュカイ族は何らかの繋がりみたいなものがお互いにあるようである。カシュカイ族の居住地区は中低所得層地区にあると前述したが、カシュカイ族のなかにはDさんのような資産家もいるし、またCさんの父親や姉妹は航空会社勤務であり当地の高額所得者層に属するといえる。翌年にDさんの消息を聞くともう店はたたんでしまったそうである。あれほど観光地の一番いい場所で商売を営んでいたが、理由があり店舗は他人の手に渡ったそうだと聞くことを聞いた。

6. おわりに

今回イランで現地調査をするにあたって、人々の対応はどのようなものであるか心配していたが、予想以上に協力的であった。イランでは実質の失業率が

40パーセントを超えているらしく、若者は収入の手段を探している。大学卒業のものは語学力を生かして収入を得ようとする。また当局は外国人に対するイラン人の不法行為に対してきびしく監視している。例えばイランではどこの空港でも白タクはほぼ排除され、手配制になってるため安心して移動ができる。それ故、治安もよく、安心して滞在が可能である。
以上、簡単ではあるが調査の背景的な側面を中心に報告した。

参考文献

- Csató, Éva (2001) Present in Kashkay. *Turkic Languages* 5, 104-119.
- _____ (2004) On copying in Kashkay. In Csató, É.Á. , B. Isaksson and E. Jahani (eds.) *Linguistic Convergence and Areal Diffusion: Case studies from Iranian, Semitic and Turkic*. London and New York: RoutledgeCurzon, 271-283.
- Doefler, Gerhard &Hesche, Wolfram & Ravanyar, Jamshid (eds.) (1990) *Oghusica aus Iran*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Kowalski, Tadeusz (1937) *Sir Aurel Stein's Sprachaufzeichnungen im Äinallu-Dialekt aus Südpersien*. Kraków: Polska Akademia Umijętności.
- Kuribayashi, Yuu (2004) Syntactic borrowings of Azerbaijani and Qashqay in Iran. Paper read at the 12th International Conference on Turkish Linguistics. Dokuz Eylul University. Izmir. Turkey.
- Soper, John (1996) *Loan syntax in Turkic and Iranian*. (Eurasian Language Archives 2.) Bloomington, Indiana: Eurolingua.

略号

ACC	Accusative
DAT	Dative
DEF	Definite
IMP	Imperfect
LOC	Locative
OPT	Optative
PST	Past
SG	Singular

Report on fieldwork on Kashkay lexicon and syntax

Yuu KURIBAYASHI

(Okayama University)

This report provides the background for fieldwork on the lexicon and syntax in Kashkay, a minority Turkic language in Iran, leaving the detailed presentation and analysis of data for another occasion. In particular, syntactic characteristics noticeably seen in the younger generation, as well as lexical influences from the Persian language, are pointed out.